

◆ここ数年来、蟬声が少なくなっている。以前はうるさいというほどの油蟬の声で昼寝もできない位にぎやかだったのが、最近では全く聞こえない有様である。その原因の一つに、増えた雑草を人手で除草するのではなく、除草剤などを使って枯れさせて済ませることが多くなり、その薬剤が蟬の生育を阻害しているのではないかと思わざるを得ない。現在の人間は自然の大切さを考える余裕が無い生活なのか、気候も同じだが、各地のことを認識すべきなのだ。最近では考えるようになった。これらの原因によって近い将来、必ず食糧難の季節がやってくるのではと思っっている心配性のままで生活している。

池田桂一

◆連日、テレビで次々と全国各地の桜の名所が映像に出る。花見に行ったつもりで、近くを散歩しながら平成最後の花だと見ていると、もう筍が出てくる。今年も近所の方々が一人分だと言って、筍御飯と煮物や取り合わせの品まで添えて、すぐ食べられるようにして持って来てくれる。周りの方たちの親切な心に胸が熱くなる。刻々と移りゆく季節を新しい時代の風に吹かれながら、元氣をもらうことにしよう。

市川茂子

◆冬の間は、なかなかよくならない膝痛に悩み、あとではセルフケアを試し、励んだ。あたたかくなってきて、痛みは残っているものの、生活にさわらなくなっていた。これが春先で、連休後、ある朝、朝食準備中に、パン切りナイフで、左掌の小指付け根部分を深く切ってしまった。がっかりしたが、流水で血を洗いながら、右手指で圧迫した。その間一時間でも止血しきれなかった。緊急電話相談に相談した。時間外もすぎている、整形外科か、と思ったが、込んでいたので、同じ病院の外科に診てもらったら、すぐに縫ってくれた。面倒な説明は看護婦さんにした。冷凍の食パンの一切れに中まで火が通るように十文字に刻み目を入れようとした。それを、左掌の上でしてしまった。まな板は洗って立てていて、使ったらつど洗う、その面倒さから、まな板を使うのを省いてしまっていた。キッチンには、いろいろ危険（リスク）がある。わかつてはいたが、してしまふ。一週間が経過。抜糸まではいたい十日だという。

小野澤繁雄

◆ある調査によると、現在の中学女子の平均寿命は一〇七歳になるそうである。だから西暦二一〇〇年までは確実に生きることになる。気が遠くなりそうだが、そうなくても男子はそういなくて、女子の平均寿命を追い越すことはできない。「お前百までわしゃ九十九まで」の夫婦観は二十二世紀になっても続くということか。

神村ふじを

◆^{あだか} 恰も、平成の世に名残を惜しむように、今年の桜は長く咲いてくれました。子供の頃、「開花から一週間が花見時」と、我家では、上野の花見の後、仕出し屋から料理を取って酒宴を開いたものだった。やたらに忙しい時期であった。今年は姉の介護とその後のため近場の桜を外出のたびに何度も見ることと花見とし、桜餅を食べて堪能した。

河村郁子

◆ごくちっぽけな世界でも、うまくいったと喜んでいると、たちまちひっくり返ることをちよつとだけ書いた。元号が変わっただけで一つでも良くなることがあると心から信じている人が政治家やメディアの中に一人でもいるなら、話を聞いてみたい。一年後でいい。

河内愛子

◆待ちに待った春がやってきました。寒波が度々きましたので本当にうれしく思っています。春は心を高揚させる何かがあると思います。これから梅雨入りまで佳い日々が続くことでしょう。若い時と違いいろいろできませんが、あの頃以上に期待に胸ふくらませております。大きな災害が起らないように祈るばかりです。

谷垣満壽子

◆農耕の季節がやってきた。この三十数年縁の下の力持ちとして手伝ってくれていた父は、いよいよ足腰が弱まり、今年からはほとんど私一人でやらなければならない。不安感でいっぱいだった

が、先日近くの親切な中堅農家にトラクターをかけてもらい、農作業は順調に進んでいる。労働の後の楽しみは何といっても冷たいビール。そのビールが除草剤のグリホサートに汚染されていることがわかった。アメリカの団体が検査したところ、ハイネケン、バドワイザー、ギネスなどからグリホサートが検出されたとのこと。大麦が汚染されていたらしい。グリホサートはさまざまな健康被害が起きるとして、EUでは三年以内に使用禁止になると聞いている。日本でも市民が声をあげ始め、「ダイソー」ではグリホサートの販売を中止するという。

新野祐子

◆散歩で立ち回るあたりには桜が多い。圧倒的に多いのは染井吉野だが、しだれ桜や、花そのものが小さい桜、花が散らないうちから早くも葉っぱが出始める桜など、さまざまな種類がある。なかでも咲き始めは薄緑色で、やがてクリーム色、薄紅色に色を変える珍しい桜がある。御衣黄ぎよいこうというのはこの桜ではないかと思うのだが、よくわからない。花期が長く、この桜が散ると、このあたりの桜は完全に終わりになる。

松井淑子

◆このところ、認知症保険に入らないか、とすすめられている。なつてからでは遅いのですよ、と言われるし自分でも思うが、まだその気にはなれない。話はちがうが、私よりやや若い友人が以前、保険ではなく病院で認知症の検査を受けた人がいる。受けた理由は、家族にボンヤリしてし

まった人がいたそうで、近い将来自分もそうなってしまったら、と思い受けてみたそう。今特にどうということもなく処方された薬を一粒、毎日飲んでいくそう。

丸山弘子

◆五十二歳になった。私は自分の年齢を受け入れているつもりだったが、なぜか髪染めだけは止められなかった。私にとって髪染めは若作りではなく「マナー」のひとつだった。しかし、いろいろ考えた結果、今年一月から髪染めを中止した。少しずつ生え際が白くなり出し、流行りのグレイヘアになりつつある。たかが髪染めと思っただが、これは生き方の問題だと気づいた。私は、アンチ・アンチエイジングでいく。久しぶりに会う知人、「一気に老け込んだね」と評する人がいれば、「上品だねえ」と褒めてくれる人もいる。私への視線にもやはり生き方が現れる。 山内裕子

